

まだ怖いでも進む



トレーラーハウスに集まった人たちと乾杯する徳住大亮さん(左)。「これからが大変だぞ」と自分に言い聞かせた=16日夜、大島町元町2丁目



トレーラーハウスの居酒屋と徳住大亮さん

大島 被災地を歩く

36人が死亡、3人が行方不明になった土石流災害から1年を迎えた16日の伊豆大島・大島町。島民は思い思いに犠牲者に祈りを捧げた。生活を再建しようとする人たちは一歩を踏み出すが、不安は消えていない。

町役場にほど近い献花台には、朝から多くの島民が訪れた。そばを土石流が押し寄せた沢「大金沢」が流れる。徳住大亮さん(48)は、献花台に来る人たちを見つめ



土砂崩れのあった現場で営まれた一周忌法要

移動できる店にぎわいを鎮魂歌に

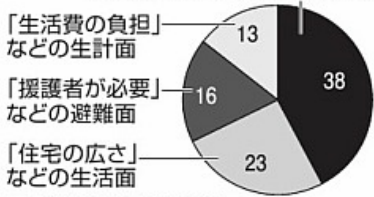
ながら、居酒屋の開店準備に追われていた。ここで両親と焼き鳥屋「花鳥」を営んでいた。あの夜、店舗兼自宅で血洗いをしていて土石流に流されかけた。建物は大規模半壊となり、解体された。両親は今年1日、大金沢から400メートル離れた場所まで花鳥を再開させた。徳住さんは独り立ちの機会と受け止めた。だが、この一年の稼ぎはゼロ。貯金は底をついていた。以前の店の跡地を使うしかなかった。大雨が降ると、「土石流を体で覚えている。寝られない」。そこで思いついたのがトレーラーハウスだ。危険が迫れば、車につないで店ごと逃げられる。長さ8・4メートル、幅3・4メートルのハウス内に、調理場やカウンター席をそろえる。来月、店を開きつつも、開店にかかる費用約2千万円は銀行から融資を受ける。16日夜、常連客が酒やつまみを持ち寄った。「このにぎわいを僕なりの鎮魂歌にしたい」。災害時には炊き出し用の移動施設にもなる、と前向きに考える。

自宅再建割れる希望

町役場から北に3キロ。プレハブの14棟が並び、徳住さんを含む35世帯の82人が暮らす仮設住宅がある。住宅をどこに再建するか、住民の声は割れていた。元町議の阿部比左志さん(84)は、都や町の災害対策で安全になると信じる。

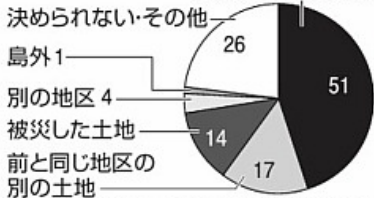
被災者が困っていること、不安なことは…

「精神的に不安」などの健康面



今後住みたい場所は…

今住んでいるところ



大島町が4月18～30日に被災113世帯に調査した結果(未回答の世帯もある)

けど、怖さは無理」町は5月、住宅被害で罹災証明を受けた178世帯のうち、1・13世帯に対するアンケート結果をまとめた。今後住みたい場所について尋ねたところ、元の土地での再建を望まない世帯が6割を占めた。一方、全壊の4世帯、大規模半壊の2世帯を含む14世帯が元の土地での再建を望んだ。町は9月、復興計画を公表した。被災地区を4ゾーンに分け、①砂防ダムより山側は積極的に使わない②被害が大きかった神達地区はメモリアル公園などにする③大金沢沿いでは流路を改修しつつ住宅再建を支援する④沢から離れた地域では現地での再建を進める――とした。

都と町の計画では、大金沢を掘り下げて、両岸にそれぞれ幅4メートルの管理用道路を作る。安全に土砂を流せる量を増やす考えだ。しかし、町が買収の範囲を明らかにしていないため、「どこに家を建てていいのかわからない」と、被災者から不満が出ている。

昨年12月に「伊豆大島被災者の会」を設立した1人、釣具店経営の那知絹枝さん(63)は「店を再建した後、『この土地を買い上げる』と言われても困る。町の対応は遅い」と指摘する。

川島理史町長は朝日新聞の取材に、「町の対応の遅さで不信が高まったのは申し訳ない。まもなく大金沢の改修計画は固まる。これから復興をどんどん進めたい」と話した。

(藤原学忠、別宮潤一)